クラーケン

クラーケン（kraken）。伝説の海の怪物の名で称されるこの生き物は、水棲の捕食獣（イーター）。
まるで巨大なタコのような姿、幅１メートルを超える大きな口の中には無数の鋭い歯が並んでいる。２メートル近くある顔兼胴体からはその倍以上の長さの触手が８本伸びており、強力な吸盤で獲物を捕らえる。

また水中で強力な電流を流し、電気ショックにて獲物を失神させ抵抗できなくしてから貪り喰うモンスターである。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

【第１話】

美少女アイドルグループの水着撮影会がとあるビーチで開かれた。撮影の後、彼女たち５人は近くの浅瀬でシュノーケリングを楽しむ。しかし、破れた水着だけを残し彼女たちは行方不明となってしまった。彼女たちに何が起こったのか？それを知っているのはこれらの獲物たちを貪り喰った本人だけである・・・

この近海に棲むイーターは夏が好きだった。美味いご馳走がたくさんやって来るからである。今年の夏は例年以上に獲物が多かった。
今日現れた獲物は５匹。ハイレグやビキニを着た１０代と見られる少女たち。彼女たちはアイドルであり、ファンの多くも若い女性ばかり。

水深が３メートルもない浅瀬でイーターは獲物たちを見つけた。水棲捕食者である彼からすれば動きの鈍い獲物を捕らえるのは簡単であるが、１匹捕らえた隙に他の獲物たちに逃げられる可能性もある。それは嫌だ。こいつらは全員喰う。それを実行するための技を彼は持っていた。

電気ショックである。自身の身体から高圧電流を流し、近くにいる獲物たちを失神させることが出来るのだ。獲物たちは２メートルほど間隔を空けつつも、海面で一塊になって一方向に泳いでいる。

獲物たちは自分たちが狙われていることに気づかずシュノーケリングを楽しんでいる。水は透き通っており視界は良好だが、海底には大きなサンゴがあちこちにある。それが障害物となり捕食者の接近をカモフラージュしている。

イーターは後方から水中を進みご馳走に迫っていく。最後尾の獲物から３メートルほどにまで接近。これ以上近づくと気づかれる恐れがある。「今だ！」とばかりに高圧電流を放電！

海面で泳いでいた少女たちは一瞬硬直したかと思えば、すぐに気を失いプカプカと浮かび出す。完全に脱力していて、もう何も抵抗できない状態。まだ肺に空気が残っているからか今のところ沈まず浮いてはいるが、肩と後頭部以外は海水につかってしまっている。このままでは窒息してしまうがそれ以前に、もはや彼女たちは食肉となる運命が確定

した。

彼は４メートル以上もある触手を８本持っており、これらで一番近くに浮いている獲物を捕える。強力な吸盤が少女の身体に吸い付く。水着にも強く張り付き、食べるのに邪魔なこれらを破り捨てていく。アイドルの少女は、やや大きめな乳房も尻穴も無毛の陰部をもさらされる。

アイドルとしても女性としても人としても屈辱的で尊厳を奪う行為。だが、イーターにしてみたらアイドルだろうが何だろうが、ただの餌であり食肉でしかない。美味そうな雌肉でしかない。

裸にされた雌肉を大きな口で喰らいつく。鋭い無数の歯が柔らかい肉に突き刺さっていく。この感触がたまらない。一口で少女の上半身は捕食者の口の中に隠れ、口の外には生尻をさらしながら下半身が突き出ている。
二口目、三口目と雌肉を呑み込んでいく。ボリュームのある尻も強い咬合力に負けぷニュッと潰れるばかりか、バキッと腰骨を砕くほど。そして１０秒もたたずに丸呑みにし

てしまった。美味い。すぐに胃の中で消化が始まる。

雌肉を１匹丸呑みにしたイーターだが、まだまだ空腹である。すぐに海面に浮かんでいる２匹目をたぐりよせ水着を破り捨て、食べやすい裸にする。今度は下半身に喰らいつく。太ももに突き刺さる無数の鋭い歯。二口目でボリュームのある尻肉と陰部に歯が突き刺さるとともに、腰骨が砕ける音。そしてまたも１０秒もたたずに丸呑みにしてしまった。やはり美味い。だがこれで終わらせるつもりはない。獲物はすべて喰うつもりである。

２匹目を丸呑みしたあたりで、獲物の１匹が意識を取り戻す。イーターから一番離れた位置で電気ショックを受けた少女である。ゴホゴホと咳きこむ彼女は、すぐ近くで大きな黒いかたまりが動いていることに気づく。海面から時おり見えるその断片から、まるで巨大なタコのような生き物であることがうかがえる。

戦慄する少女だが声が出ない。身体もまだ電気ショックの

影響からか上手く動かせない。
巨大なその生き物は３匹目の獲物をたぐりよせ、水中に引きずり込み何かしている。しばらくすると少女の生尻が水面に浮かび上がる。

どうやら水着を破り捨てているようだ。そしてその生尻はまた水中へと消えてしまったかと思うと、かすかにバキバキッという音が聞こえた。

・・・食べている。このモンスターは少女を食べている。丸裸にして貪り喰っている・・・

恐怖にかられ逃げ出そうとするも、身体は上手く動かない。少しだけ動くようになった身体で必死にモンスターから遠ざかるよう泳ぐも、大したスピードは出ない。それもそのはず。そのための電気ショックであり、捕食者の狩りの技なのだから。

３匹目の雌肉を呑み込んだイーターは４匹目をたぐりよせ

水着を破り捨てている。逃げる少女が振り返ると、またも裸になった少女の生尻が浮かんではまた沈んでいくのが見えた。

・・・早く逃げなければ！逃げなければ自分も喰われる！早く陸に逃げなければ！

しかし陸までは数十メートルあった。距離としてはそれ程ではないかも知れないが、電気ショックを受けた今の状態ではすぐには移動できない距離。

その間イーターは悠々と４匹目の雌肉を喰っていた。さっきまでの３匹よりも乳房が大きく食べ応えがあった。美味い。雌肉特有の柔らかい脂質があり、アイドルということもあってか引き締まった筋肉もついていた。ダンスで鍛えられたのだろうか。味が美味いのはもちろんのこと、栄養素も豊富に含まれているのが分かる。

少女が数十メートル先のビーチを見ると、人がいるのに気づいた。彼女たちのマネージャーである若い女性。あちらからこちらの様子は見えているのだろうか？
さすがにこの距離では、ここで何が起きているのかは分からないだろう。このままでは喰われてしまう。助けを呼ばねば。しかし声が出ない。

なんとか力を振り絞って片手を上げる。ビーチのマネージャーは気づきてくれるか。彼女もまた片手を上げる。気づいてくれた。が、彼女はそのまま手を振る。「楽しんでるね〜」といった感じであろうか。少なくとも少女が大ピンチに陥っており、助けを呼んでいることまでは気づいていない。

しかし、少女の手前に何か黒いものがあることにもマネージャーは気づく。「ん？何、あれは？」と不思議に思う。そして数秒後、片手を上げていた少女は沈んでしまい、浮かんで来ることはなかった。イーターが最後の１匹を捕えたのである。水中で水着を破り捨て、丸裸にしてから貪り喰っていった。

なお、人数を表記する際、
人間側からは「人」
イーター側からは「匹」
と表記する。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬